

双葉郡教育復興ビジョン推進協議会
第 5 回教職員による双葉郡子供未来会議 実施報告

2018 年 3 月 6 日

1) 実施概要

日 時：2018 年 2 月 15 日（木）13:00～16:30

場 所：ビッグパレットふくしま マルチパーパスルーム 2（郡山市南 2 丁目 52）

目 的：

○子どもの主体性・協働性・創造性を育む「双葉郡独自の魅力的な教育」の在り方を探究する

○双葉郡の教職員が町村や校種を越えた交流を通して情報共有を図る

講 師：京都造形芸術大学 副学長 本間正人先生

2) プログラム

| 時間 | 内容 |
|-------|----------------------------|
| 13:00 | 1. 開会あいさつ（プログラム説明、講師紹介） |
| 13:10 | 2. 講演「子どもの力を引き出すファシリテーション」 |
| 16:30 | 3. 閉会 |

3) 参加者

| 所属 | 人数（名） | 詳細 |
|-----------|-------|---------------------|
| 浪江町 | 3 | 小学校（2）、中学校（1） |
| 葛尾村 | 2 | 小学校（1）、中学校（1） |
| 双葉町 | 3 | 小学校（2）、中学校（1） |
| 大熊町 | 2 | 小学校（1）、中学校（1） |
| 富岡町 | 7 | 小学校（5）、中学校（1）、教委（1） |
| 川内村 | 3 | 小学校（1）、中学校（2） |
| 檜葉町 | 3 | 小学校（1）、中学校（2） |
| 広野町 | 2 | 小学校（1）、中学校（1） |
| ふたば未来学園高校 | 1 | |
| 福島県 | 3 | 高校教育課（3） |
| その他 | 10 | ビジョン推進協議会関係者等 |
| 合計 | 39 | （名） |

4) プログラム内容・要旨

1. 開会あいさつ、講師紹介（石井賢一・富岡町教育長）

- ・ この研修会を始めて3年になるが、このなかで常に考えてきたことは先生方にアクティブ・ラーナーになってほしいということ。子どもを変えようとするならば、まずは先生方に変わってほしいという思いで開催してきた。昨年度まで「ふるさと創造学」を題材として扱ってきたが、別視点で学んでほしいと考え、今日は京都造形芸術大学の本間正人先生にお越しいただいた。本間先生は「学習学」を提唱しており、大変期待している。
- ・ 現在、富岡町では町での学校再開に向けて準備をしているところだが、何かを変えようとするときには一番大事なのは創造力。なかなか組織の中で創造力を発揮できにくいかもしれない。ただ、若い先生がもっと創造力を発揮できれば、ふるさと創造学の枠組みでもっと良いものができるのではないかな。

2. 講演「子どもの力を引き出すファシリテーション」（本間正人・京都造形芸術大学副学長）

教育学から学習学へ

センター試験や TOEIC で AI が満点を取るような時代に、人間が本当に身につけなければならない力とは「0 から 1 を生み出す創造力」、「人間関係を結ぶ力」、「感動を持って発見する力」だと考える。長い人生で考えると、学校教育の守備範囲はとて狭い。週に 168 時間（=24 時間×7 日）あるなかで、学校の授業は 30 時間程度（=6 時間×5 日）。1 年間で換算すると、8760 時間のうち、学校の授業は 1050 時間程度（=30 時間×35 週）に過ぎない。また、学校教育の一番お尻を最終学歴と呼ぶが、残りの人生は学ばないのだろうか。人生とは学びの連続であり、最終学歴よりも「最新学習歴」を更新し続けることが重要。つまり、いかに自分で自発的に学んでいくかが大事である。教育者の役割とは、子どもたちの学びの意欲を引き出すことにある。子どもたちに、学ぶことでどんなよいことがあるのか、どんな未来が待っているのか、ご自身の体験談とともに語っていただき、学習者としてお手本を見せていただきたい。

教育と役割の変化

これまでの教育学は、「学校という場において教える側が主役の教育」（Teaching）が中心であった。しかし、これからは、Teaching が E-ラーニングに置き換わっていき、教師の役割は子どもたちの学びの促進（Facilitating）や 1 対 1 の個別指導（Coaching）へとシフトしていくだろう。

Teaching 中心の教育によって、子どもが Teachee（=受け身で教わる人）になってきたことは、文部科学省が「アクティブ・ラーニング」を重視し、社会的に注目を集めている背景にある。人間はそもそもアクティブ・ラーナーであることを忘れてはいけない。人間は学習する存在（Homo Discens）である。真のアクティブ・ラーニングとは、一人ひとりの人間が生まれながらにしてもともと、アクティブ・ラーナーだったということに気付くこと、再発見することにつながるものでなくてはならないと考える。

Teaching とは外から教え込むことであるのに対し、Coaching とは中から自発性や可能性を

引き出すことである。具体的に引き出すには、「傾聴」、「質問」、「承認」の3つのスキルが必要。

コミュニケーションの3つの機能

① 理解を増やす

それまで相手に対して、先入観や固定概念、思い込みであったものが、コミュニケーションをとることで次第に薄れて、未知の世界へも理解が深まる。

② 人間関係に影響を与える

コミュニケーションの基本はフェイス・トゥ・フェイス（F2F）である。言語コミュニケーションよりも非言語コミュニケーションが大事。特にデジタルネイティブの世代は、F2Fのコミュニケーションのチャンスが少ないため、意識して取り組まなければ伸びない。

③ 信頼関係を築く → **言語コミュニケーションのポイント**へ続く

ペアワーク：人物観察当てっこゲーム

○先攻・・・相手がどのような人物なのかを考えて言い当てる

（好きなもの、趣味、家族構成などテーマは自由）（2分）

○後攻・・・その間は無言で

終わったら役割を交代。その後、事実確認の時間を設ける（4分）。

言語コミュニケーションのポイント

① 相手の立場に立ったわかりやすい指示

コミュニケーションは相手の立場に立つことが大事。言葉には多義性があるので、誤解のないように紛れの少ないコミュニケーションをとる。

② 急に指示するのではなく予告が大切

予告をしていると、心の準備ができる。

③ 相手に合わせて表現を変える

Teaching はすべての人に同じ内容を同じ方法で伝えること、Coaching は相手に合わせて指導内容や指導方法をカスタマイズすることである。人間は経験を積むことによってパフォーマンスが上がるため、過去の固定概念に基づいて指導するのではなく、今の相手に合わせて常にバージョンアップ（upgrade）することが大切。

④ 何の問題のない時にも意識的にコミュニケーションをとる

コミュニケーションをとる頻度は、問題がある時に増え、上手くいっている時に減るのが一般的。しかし、何の問題のない時こそコミュニケーションをとり、現状・目標を伝えて、ビジョンを共有することが大事。

⑤ 信頼の階段

発言した内容と行動が一致しているときに信頼は徐々に築かれていく。しかし、信頼が壊れるのは一瞬。

⑥ 手を離す＝人を育てるポイント

指導をするうえで良くないのは過干渉と過放任。「任せて任さず」が理想。任せることによっ

て一人ひとりの自発性や責任感、アイデアを引き出す。しかし、任せっぱなしにはせず、時々フォローの質問を入れて状況や気持ちを把握することが大切。

ペアワーク：ブラインド・ウォーク

- 先攻・・・目を閉じて歩く
- 後攻・・・介助者。言葉を掛けながらサポートする
まず介助者の肩や腕の内側を持つなど手を触れた状態で行い、その後手を離して行う（各3分）。終わったら役割を交代する。

傾聴のスキル

個人差はあるが、誰しも「共感欲求」を持っている。傾聴のスキルであるアクティブリスニングの3要素は、あいづち、うなずき、くりかえし。

聞く側があいづち、うなずき、くりかえしを一切しない場合には、話す側は言葉が出にくくなり、自分の言葉に自信が持てなくなる。うなずくだけでも、聞いてもらえているという実感が持て話しやすくなる。コミュニケーションをとるうえでは、聞く側のイニシアティブが重要。

ペアワーク：アクティブリスニング

- 先攻・・・所属についてのよいところを発表（1分）
- 後攻・・・アクティブリスニングの3要素（あいづち、うなずき、くりかえし）は一切なし、無反応・無表情で話を聞く
終わったら役割を交代し、その後4～5人で感想を共有（2分）。

質問のスキル

Coachingにおいて、傾聴の次に大事なのは質問の力。質問は言葉や気持ちを引き出すのに対し、詰問は相手を責めて黙らせる反語表現である。「なんでそんなことしたの！」といった反語表現は、期待が裏切られたときの残念な気持ちから出る「心理的仕返し」であると考えられる。

ヒーロー・インタビューはさりげなく自然にやるのが大切。組織のコミュニケーションは特に、上司と部下、教師と児童生徒、教師と保護者など、ポジション・トゥ・ポジションになる傾向がある。立場を越えて、心と心の通い合うハート・トゥ・ハートの関係を築いていただきたい。

ペアワーク：ヒーロー・インタビュー

- 先攻・・・インタビュアー。興味・好奇心をフルに発揮し、映像が浮かぶように質問する。傾聴のスキルを実践
- 後攻・・・ヒーローは、一番頑張ったこと、充実感ややりがいを感じたとき、成功体験など、具体的に細かく映像的に話す
終わったら役割を交代する（各5分）。

褒めるスキル

褒める能力を高めるには、まず自分が褒められることが大事。そして、褒め続けていった人が褒め上手になる。大切なのは、最初の違和感で挫折しないこと。褒められると、その人自身の

自信につながる。教師からすると、自分を基準とするので、子どもの未熟なところやよくできていないところが目に付きやすい。美点凝視で、子ども一人ひとりの強みや伸びているところを見付けようと意識することで、初めて見えてくる。

ペアワーク：褒めるタイム

○先攻・・・褒める係。事実関係に基づいて、心を込めて褒める（30秒）

○後攻・・・褒められる係

終わったら役割を交代する。その後、感想を共有（2分）。

3. 閉会あいさつ（石井賢一・富岡町教育長）

- ・ 3時間半があつという間に過ぎ、有意義な研修になった。また、本間先生が双葉郡の現状を理解してお話くださって大変うれしく思った。これから、子どもたちの力を引き出すために、我々みんなで頑張っていきたい